
好きなのに、好きだから

松の慎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

好きなのに、好きだから

【Nコード】

N1964B

【作者名】

松の慎

【あらすじ】

俺らってどんな仲？いつも一緒、なんでも一緒、好きな奴も一緒だけど・・・ケンカもしたけどやっぱり一番大切だから。だからつい笑いあってしまう——・・・恋愛をしながら成長する男の子たちの友情物語。

だって、どうしたら良いのかわからない。
俺にはもう、なにをどうしたら良いのかわからないんだ。

「おい。おい、ばか玲緒」

「なによー郁」

「お前ってさー……やっぱなんでもねえや」

「はぁ？ なに言ってるのーもう」

読者のみなさんに質問。

あなたは、自分の好きな人に、○○のことが好きなのか？ って聞けますか。

「今日も仲良いな、玲緒、郁」

たとえば、その○○の相手が俺の親友だったとしたら。

「隼人。これは仲良いっつーんじゃないじゃなくてじゃあってるだけだ」

「ばか郁。意味は一緒じゃないの」

「うっせ。心意気が違うんだよ」

「なにそれー」

ふふっと笑う君が好き。

たわいもない会話をしてるときの君が好き。

俺は本気で玲緒に恋をした。

だけど、もし玲緒が隼人を好きだったら。

ていうか、きつとデキてるんだ。この2人。

周りから見たら恋人そのものなんだ。

「さーて、じゃあ邪魔者はとっとと消えますか」

席を立つ。

その場を離れようとする、玲緒が声をかける。

「郁？」

「じゃーなっ」

だけど玲緒のほうを見向きもせずに、教室を出る。

「どーしたんだろ、郁」

「さあ・・・」

なんかさ、よくみんな言うじゃん。

好きになったら自分のほうに振り向かせてみせるとか、好きな奴が
幸せなら自分も犠牲にできるとかって。

だけど俺、そんなことってあるのかって思える。

俺は、俺が今、そうだから。

玲緒と隼人の間に俺が入る隙間なんかこれっぽっちもなくて・・・
俺に選択を与える余地さえないんだ。

伝えられない。

素直になれない。

そして、やけくそになるんだ。

自分が悪いけど、じゃあどうやったら悪くなくなるのかって言われ
ても分からない。

俺の思い通りにならないまま、時間だけが過ぎてゆく・・・

子供なところあるけど

まだまだ全然優しさもないけど

いざってときに頼りになるあなたに惹かれた。

あたしは他の誰よりも、隼人よりも、郁といるときが一番楽しい。

だけど郁はそう思ってはくれないの？

さっきもさっさといなくなっちゃって……

「好きなのに……」

郁の気持ちが分からないよ。

郁はあたしのことどう思ってくれてるの？

席に座る。

隼人がなにかを思いついたかのように口を開く。

「なあ、玲緒って郁のこと好きだろ」

「えっ?!」

突然の言葉に驚いた。

あたしが口を開く前に隼人は続ける。

「なんとなくそーかなって」

ずっと側にいた。

なにかと憎まれ口も聞いてたけど、やっぱり隣にいてくれると安心

する。

あたしにとって大きな存在の人。

「たとえば」

「ん？」

「たとえば・・・郁はあたしを好きじゃないかもしれない」

恋ってこんなにも難しいんだ。

片想いって、こんなにも切ないもんなんだね・・・

「それでもあたしは郁の側にいたいって思う。そんなあたしは・・・
ばかなのかな」

北風が心の中をヒュウッと遠るような感覚。

なにもない心の中身を見すかすかのうちに、北風は舞う。

冷たい冷たい北風は、なにを思っただけ吹いているのか。

「・・・だれもがそう思ってるよ」

「えっ」

「側にいることしかできなくて・・・だから側にいたくて。だれも
が望むこと」

「じゃあ隼人も？」

「そうだな、俺もかも」

俺は実際にそうだから。

郁と玲緒がお互い思いあっていることも知ってる。

だから、側にいることしかできなくて。

どんなに思っても俺の恋が実ることはないって分かってるから、分
かってるけど、やっぱり諦めきれなくて思い続けてしまうから・・・

だから前に進めずに止まってしまうんだ。

——昼休み

「郁ー飯買いにいくぞっ」

「おー」

いつものように、購買へ昼飯を買いに行く。

一階にある購買は人気で、はやく行かないと売り切れる。

「郁？どーしたんだよ、早く行かないとなくなるぞ」

「あのさ」

郁がその場に立ち止まる。

俺も早足で歩くのをやめて、止まる。

「お前玲緒のことどう思う？」

「は・・・なんだよ、いきなり」

「だって玲緒は・・・」

郁が口ごもる。

俺はなにを言ったらいいのか分からず、戸惑う。

「なに暗くなっちゃってんだよー。あ、わかった。告ろうとしたけど不安になっちゃったみたいな？」

「そんなんじゃない」

「だーいじょうぶだって。2人めっちゃ良い感じだから」

思っていない、こんなこと。

明るく言えば言うほど、悔しさが倍増する。

「俺にはお前と玲緒のほうが似合ってるようにみえるよ」

窓から入ってくる風がザザアツと吹く。

髪が吹かれて、一瞬時を止めた。

「・・・」

郁は無言のまま立ち去る。

そんな郁を俺は後ろから肩をつかんだ。

振り返る郁の顔めがけて、殴りつけた。

「いっ・・・」

ドサツと倒れこみ、郁は頬を押さえながら言う。

「な・・・にすんだよ！」

「こっちのセリフだ！」

拳が震える。

怒りと悔しさが同時にこみあげてくる。

だけど、それを抑えながら俺は違う方向へと歩き出す。

悔しいじゃんよ・・・

2人は両思いなくせに、俺だって玲緒を好きなのに励まさなきゃいけないことも、全部。

弱気になるくらいだったら俺に譲れよ。

「ねー隼人くん、あのねー」

「・・・えな」

「え？」

「うっせえつつつてんだよ！」

あ、しまった・・・

他の人にあたってしまった。

だけど謝ることをせずに俺はその子の前から去る。

俺が悪い・・・だけど、それを素直に受け入れられない。

5限が始まった。

今日は自習らしい。

イラついてる俺と、頬に殴られたあとが残ってる郁を見てみんなが
コソコソと話をする。

「ケンカかなあ」

「えーまさかあ。だってあの2人あんなに仲良かったじゃん」

「だよなあ。それに隼人が郁を殴るって考えらんねえし」

「でもわかんないよー。ついに仲が裂けちゃったのかもね」

そのコソコソ話に、さらにイラつく俺。

心配そうに玲緒が郁のもとへ行くのが目に入る。

「ケンカしたの？」

「そんなんじゃないよ」

「じゃあどうして・・・」

「だーいじょうぶだって」

郁は微笑する。

次に玲緒は俺のそこへ来る。

玲緒が口を開く前に俺は言った。

「別になんもないから」

「え・・・」

「ほっといてよ」

冷たくあしらった。

ただ、許せなかった。

さっさと2人がくつついてくれれば俺も諦めがつくのにな。

・・・なんて、ただ俺が辛い思いしたくないだけなんだよな。
だけど、だからこそ2人の恋が実ってほしいって思うのは、だめなことじゃないと思うから。

俺自身も、そうすることでこんな自分を許せると思うから。

・・・好きだから。

「あー・・・いてて」

口を動かすと頬が痛む。

あいつまじに本気で殴りやがったな。

——俺にはお前と玲緒のほうが似合ってるようにみえるよ——か。
なに言ってるんだろ・・・俺。

自分で言ってるじゃ世話ねえよ。

でもなんであんなに怒ったんだろう。

もしほんとのことだったら喜ぶとこだよなあ。

「郁ー」

「あー玲緒」

「帰るの？1人？」

「まあな」

たぶんまだ隼人は教室にいるだろうけど、気まずくて声をかけられなかった。

靴箱から靴を取り出す。

「なんか・・・あったの？」

「なんも。玲緒は気にしなくて良いよ」

「気にするよ！」

玲緒の大声に、一瞬驚く。

「だってあたし郁のこと好きだもん!!」

あ。

あ。

あ・・・

全てが分かった。

——こっちのセリフだ!——隼人がそう言った意味も、殴った意味も。

俺、なんてことしちゃったんだ・・・

「郁っ?!」

靴を落として、教室へ向かって駆け出す。
やっと、やっと分かった。

あいつどんな思いでっ……………

「隼人！」

ドアを乱暴に開ける。

隼人は驚いてこっちを振り返った。

「郁」

はあはあと息が切れる。

「お前っ……………ほんとにばかだ！」

「は……………」

「だけど……………俺はもつとばかだ」

気付かなかったじゃすまされない。

深く傷つけたんだ。

たとえば今、玲緒に好きだと言われたけれど置き去りにした。

そのことでもし俺が振られたとしても俺は構わない。

玲緒も好きだけど、隼人も大好きだから……………だから、俺が隼人を傷つけるくらいだったら俺が玲緒に振られて傷つくほうが良い。

そのくらい、大切な奴なんだ。

「なんも知らない上に隼人まで傷つけた……………俺、最低だ」
「……………最低なのは俺もだ」

一緒に笑って
一緒に遊んで

ときにはケンカもして・・・
だけど、また笑いあうんだ。
俺らってそーゆー仲だろ？

「かわいそぶって結局はなにもしてない・・・俺なんかにお前を殴る資格なかったな」
「そんなことない」

俺は隼人に近づいた。
隼人の目を見て言う。

「俺、お前のこと大好きなんだ・・・だから、もうなにも隠し事もしたくないしされたくない」

隼人がうなづく。

「俺は玲緒が好きだ」
「俺も、好きだ。だけど俺はお前らを応援しようと思った」
「ほんとか？」
「ああ」

そして、大声を出して笑い出す。
なんだか全部がおかしくなって、笑ってしまふ。

「これで友情復活だな」
「もちろん」

手と手をたたきあう。

パンツと音がしたとき、俺らの友情はもっと大きなものになった。

「大丈夫か？ 殴ったところ」

「もー平気。それになんかこれ良くない？ 男の勲章みたいな」

「ほお。じゃあ反対側もつけてやろっか」

「遠慮しまっす」

そして、いつもの俺たち。

「おーなんだ仲直りかよ」

「いーもん見さしてもらったぜー！」

周りからやじが飛ぶ。

「げっ、人前だった！」

「うっせーぞ、外野っ」

荷物を持って、教室を出る。

隼人と肩を並べて歩く。

あ、そーいえば玲緒置いてきたまんまだった。

やべー怒ってるかも。

玄関について、落ちてる靴を拾う。

「なんで郁の落ちてんの？」

「さっき急いでてさあ」

笑いながら靴を履こうとすると、玄関の外に玲緒の姿が見えた。

「玲緒?!」

俺が叫ぶと、玲緒が振り返る。
俺らに気づいてこっちへ来る。

「待っててくれたのか？」

「うん。待ってれば来るかなって」

「怒って・・・ないの？」

俺は隼人の顔を見る。

隼人は頭に?を抱えて俺を見た。

「・・・そーだな、じゃあ俺もけじめつけるか」

「え？」

「見てろよ隼人っ」

にっと笑ってそう言った。

そして玲緒に向かって言う。

「好きだ」

隼人が俺らの応援をしてくれるって言うのなら、俺もちゃんとしなきゃな。

「もー・・・振られたかと思ったよ。さっき告白中に走っていなくなるんだもん」

「え、さっき？」

隼人が口をはさんだ。

「じゃあさつき、告られてたのに俺のどこに？」

「う……い、いーんだよ。早く隼人るところ行きたかったんだ」
「郁……」

顔が赤くなるのを感じた。

めっちゃ恥ずかしい……

「俺も郁のこと大好きだからなっ」

そう言って隼人は後ろから抱きついてきた。

「わっ!!」

一瞬よろけそうになった。

「あ、なにー？2人してなんの話よー」

「なーいしょっ」

恋愛と友情どっちが大事かってよくみんな聞くじゃん？

だけど俺には選べないよ。

だって玲緒と隼人どっちが大事かってことだろ？

選べってほうがおかしいって思うから。

12月に入りかけていて寒くなりつつある、ある日の
俺らだけの友情物語。

f i n

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1964b/>

好きなのに、好きだから

2010年12月13日22時29分発行